初恋

恭架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
初恋

【Ｎコード】
Ｎ６１５６Ｑ

【作者名】
恭架

【あらすじ】
高校生に入学した由佳。中三のときに初恋をしたが恋ということに気づいていない。物語が進むにつれ由佳は自分が恋をしていると気づいていき・・・。学園恋愛ストーリーです！！初心者ですが、がんばって書いていこうとおもうのでよろしくお願いします！！

初めての恋

あの時が私の人生の最初の恋だった。

1年まえのあの日。
私は初恋をした。

「あ、ごめんなさい。」
「ごめん。」
私の初恋はありきたりなものだった。
「すみません！」
「こちらこそ前を見ていなくて。」
ぶつかった男の子はとてもかっこよかった。
そう、まさにみんなが思う理想の男子のような。
私は、一目ぼれをした。初恋と共に。

しかし、その時、私はまだそれが初恋とは気づいていなかった。

あの日以来、
あの男の子の名前や学校が気になるようになった。

気づいたのは、それからずっと後のことだった・・・。

それから、1年がたち私は、
高校1年生になった。

「由佳、おはよー」
「おはよー！！」
「久しぶり」

私の自己紹介を。
私は今日から桜ヶ丘高校に通う北川由佳。
で、話しかけてきたのは、
同じく今日から桜ヶ丘高校に通う1年生で佐野恭。

「うちらの学年かっこいい人、多いらしいよ！
あ、でも由佳はあの人一筋だもんね。」
「ち、ちがうよ。そんなんじゃないもん。
私も恋してみたいなぁ」
恭にはあのときのことを話している。

「急がないと、遅れるよ
入学式から遅刻はさすがに・・・」
「あ、いくいく」

こうして私の学校生活が始まった。

入学式

「校長の話ながかったぁ」
「ながかったね。
つか、うち寝てた」
「は？入学式からもう・・・。
まぁ由佳らしいけどね。」
「え、結構ひどくない！？」
「気にしない気にしない。」

入学式が終わり、
教室に戻っていた。
私と恭は同じクラスになった。
クラスは1年A組。
恭の他にも、
同じ中学だった
彩夏、夏美、悠、拓、弘樹、弥生
が同じクラスになった。

クラスにどんな人がいるんだろと思って、
周りを見わたしてみた。

もうグループができはじめており、
クラスのいろんな所で話が始まっていた。

ほかも見ていると、
ありえない人の姿があった・・・。

あの人が

えっ何で？
私は思った。
あの人の姿が窓際の席にあった。
同じクラス？という疑問よりも、
同じ学年？という疑問をもった。

あの人の姿を1年前に見たときは
私よりも、年上に見えた。

真っ先に恭に話しかけようと思ったら、
恭は私の異変に気づいたようで、
話しかけてきた。

「由佳、どうかした？」
「あ、あの、窓際の席の人。」
「窓際の席の人どうかした？
つか、かっこいいねぇ」
「あ、あの人が」
「あいつがどうかしたの？」
「中3のときに見た人・・・。」
「はぁ？」
恭はいまいち理解していないようで、
「だから、あの窓際の席の人が、
中3のときにぶつかった人。」
「えっ！？」

席

「何でここに？」
まぁ、これだけ騒ぐと向こうも
気づいたようで、
「おれになんかついてる？」
話しかけてきた。
「いや、何もないけど」
「あ、そう」
私の頭の中は完璧に混乱していた。
「由佳、由佳！！」
「え、あ、はい！」
「やっぱり、あの人なの？」
「う、うん」
「もうすぐ、ＨＲ始まるからまた後で」
で、自分の座席を確認してみたんだけど、
「え！？」
おもわず、声が出てしまった。
自分の席がなんと、
あの人の前だったのだ。

え～～～
こんどは心のなかで叫んでいた。

名前

ＨＲが始まった。
まぁ、ＨＲというより自己紹介？に近かった。
クラスメートは、自己紹介をしていき、
「・・・悠です。よろしくお願いします。」
悠の自己紹介が終わり、
「次！！」
私の番になった。
「え、えっと、北川由佳です。よろしくお願いします。」
よかった～。少しほっとした。
私は結構緊張しやすいタイプで、
よく、失敗していた。

私が終わりということは、
次は・・・！？
しっかり聞かなきゃと思い、座った。
「俺は、佐野　蓮です。
一年間よろしく。」

佐野蓮っていうんだ。
かっこいい！！！
席も前後だし、
チャンスかも・・・

お互いの家

「へぇ、お前、北川由佳っていうんだ。
席、前後だしよろしくな。」
「あっ、うんよろしく。」
「ねぇねぇ、家どこ？」
「え、えっと、桜田マンション」
「え！？
何号室？」
「９０２号室だけど・・・。
なんで？」
「いや俺、桜田マンションの９０３号室なんですが・・・」
「「・・・」」
「「偶然？？」」
「今日家いっていいか？」
「いいけど、一人暮らしだし」
「でも今日は恭もいるけどいい？？」
「女子の佐野か」
「あ、うん」

こうして、佐野が家に来る事になった。

隣の家

ピンポ～ン

「おじゃまします～す。」
「あ、恭。いいよ～。
入って入って。」
「じゃ、遠慮なく。
でも、やっぱり、きれいだね。
一人暮らしなんていいなぁ。」
「そうかな？」
私はいろいろ事情があり、一人暮らしをしている。
「じゃ、佐野も呼ぼっか。」
「あ、うん。
行って来るね。
といっても、隣だけど・・・。」

ピンポ～ン

「あ、北川か？」
「う、うん。」
「もう行っていいのか？」
「うん。いいよ。
恭もきてるし。」
「じゃ、すぐ行く。」

家に来た！

「いいよ、入って。」
「お邪魔しま～す」

「造りは同じだな。」
「それは、同じマンションだし。」
「なぁ、佐野。俺らさ、紛らわしいからさ。
下の前で呼ばない？」
「いきなり！？」
「いいじゃん別に。
北川もいいよな？」
「い、いいけど。」
「う～んじゃあ。由佳がいいっていうんなら。」
私は内心結構ビックリしていた。
「じゃ、恭と由佳と蓮ってことで。
よろしく。」
「分かった。よろしく、蓮。」
「う、うん。」
こうして、私たちは下の名前で呼び合うこととなった。

学校

やっぱり蓮はイケメンだ。
おまけにスポーツができて、話しやすい。
そうなればもちろん、多いわけなんだよなぁ。
告白。
入学して一か月後で告白回数は8回。
モテる人は違うなぁと思っていたんだけど、
それを恭に聞くと、
恭も3回は告白されてるっていうし。
確かに恭も可愛いけど、
一回も告白されてない私はやばいんじゃないかなとも思っているんだけど。
まぁ、いいか。
前向きに考えよう。
で、あれから、
一か月たったんだけど・・・
はっきり言って何の進展もなし。
あれ以降、毎日のように
三人のうちの誰かのうちに行って遊んだり、放課後遊びに行ったりしていた。
ある日、蓮が言った
「ねぇねぇ、
今度夏休みどこか行かない？」
「とまりで？」
「うん。泊まり。
他にも何人か誘ってさ。」
「う～ん。うちは別にいいよ。」
「由佳は？」

「泊まりでしょ。」
「そうだけど。ダメ？」
「いや、いいけど。」
「じゃ、決定な。」
「う、うん。」

夏休み！

「・・・では、夏休みは
安全に過ごしてください。」

「あ～～、やっと終わったよ。」
早く帰ろうよ～。」
「アイスでも食べながら帰る？。」
「いいよ～。
蓮、そういや結局、旅行、誰誘ったの？」
「えっと、この3人と悠と拓と弘。」
「弘樹も誘ったの？」
「うん。結局。
まあ、人数合わせよっかなぁ。
って思ったからさ。」
「まぁいいけど。」
「中学違うの蓮だけだけど、いいの？」
「いいよ。もう慣れたし。」
「恭、なんかテンション低くない？」
「・・・」
「恭？どうかした？」
「・・・」
「恭～？」
「えっ。いやなんでもないよ」
「本当？」
「うん。
で、何の話してたんだっけ？
ごめん。聞いてなかった。」

「も～。しっかりしてよ～。」
「ごめんごめん。」
恭はその日テンションが低かった。
その時なにがあったのか聞けばよかったのに・・・。

恭

初恋～恭～

やっぱり今日もか・・・。
上靴が泥だらけ。
イジメなんだろうけど。

「あ～。」
ため息が自然と出てしまう。
多分、いつも蓮といるからなんだと思うけど。
さすがにこう何回も続くと嫌になってくる。
クラスでは普通に女子とも男子ともしゃべっている。
「ど～しよっかな。」
「おっはよ。恭。」
「お、おはよ。
恭、上靴は？」
「えっ。あ、うん忘れた。」
嘘をついてしまう。
さすがに由佳に言う訳にはいかないし。気にしすぎそうだし。
「何してんの、恭？
最近忘れ物多すぎない？」
「う、うん。なんか寝不足で・・・」
「ちゃんと寝なきゃ。
あっ、やばい。今日、日直。
先に行くね。」
「はいはい。じゃ、あとで教室で。」

補講

あっつ～～～い！なんで夏休みなのに学校に来なきゃいけないの～？」
「そりゃ、由佳が勉強せずに試験受けて、追試でも赤点取って、補講になるからだろ？」
「それは、そうなんだけどさ・・・。
そういやさ、なんで蓮も学校に来てるの？」
「ん？いや、別に。なんとなく夏休みの補講があったから、ほかにすることもないし、入れた。」
「ふ～ん。真面目だね～。」
「でも、この学校、補講少ないからいいよな。」
「そういえば、そうだね。」

補講・・・。
めんどくさい。
私と蓮は、補講が始まってから、二人で学校まで行っている。

とにかく暑い。
「明日で補講も終わりだろ？」
「だけど、明日テストだよ。
ど～しよ～。」
「授業中、寝たってことは？」
「ない。」
「勉強してないってことは？」
「ある。」
「勉強する気は？」
「ない。」
「ってことは、旅行に行く気もないってことか。

分かった。由佳はキャンセルってことで・・・・。」
「い、いや、それは・・・。」
「じゃあ勉強して。」
「わ、分かったよ。」
「俺も手伝ってやるからさ。」

テスト勉強

「蓮〜〜。
ここが分かんない。」
「さっきから分かんないのばっかりじゃん。」
「由佳。本当に高校生??」
「そうだよ〜〜。
私は数学が苦手なだけ。」
「それをさっき日本史でも聞いた気がするんだけど。」
「そうだっけ?」
「まぁ、いいや。で、どこが分かんないの?」
「ここだよ。ここ・・・」

明日が補講最後でありまた、テスト。
蓮に勉強しなかったら、旅行には生かせないと言われたので、一応勉強してるんだけど、まったくと言っていい程わかんない。

「蓮〜。高校の勉強ってすっごい難しいんだね。」
「由佳。お前は高校以前に中学の内容もわかってないと思う。」
ひどい。前から勉強は苦手と思っていたんだけど、ここまで言われるとは思っていなかった。

「本当はしたくなかったけど、さすがに由佳はやばいと思うから、結構出そうなとこを言っとくから絶対そこはしとくように。」
「えっ。そんなのあるんなら先に言ってくれれば良かったのに。」
「教えると、今由佳が言ったことを言うってわかってたから言わなかったんだよ。」

「じゃあ。ここまでにしようか。」

「終わり？やった～～。
あぁ、きつかった。」
「ま、赤点またとらない程度にはなってると思うから。明日はがんばれよ？」
「うんっ。」

もうすぐ

旅行まであと3日。
「あ～。すごく楽しみだなぁ。」
「何が？」
「旅行だよ、旅行。
旅行に決まってるじゃん！」
「そんなに、旅行連発しなくても・・・。」

旅行まであと少し。
私は、補講のテストも無事赤点を免れて。
旅行の事しか頭になかった。
今日は、久しぶりに恭と二人きり。
蓮は、他の用事があるとかで・・・。

「久しぶりの二人きりだね～」
「そうだね。」
「どこから行く？」
「由佳が行きたいところから。」
「えっと。どこにしよっかな・・・」

今日も、恭はあまり乗り気じゃなかったのを無理やり連れてきた。
元気を取り戻してほしくて。
逆効果だったかな？
「由佳。今日はさ、うちを元気付けようとしたんじゃないの？」
うっ。図星です・・・。
こうも簡単に分かられてしまうって、そんなに私って思考回路単純なの？

「まぁ、ありがとう。」
「えっ。私はなにもしてないよ～。」
ばれてるとは思うけど自然に。

「じゃあ、いこっか。」
「う、うんっ。」
私が恭を元気付けるはずだったのになと、思いながら・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6156q/

初恋

2011年10月12日12時57分発行